

令和5年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

技術支援課
(普及指導室)

生育ステージ	早期：黄熟期～成熟期（コシヒカリ） 早植：出穂期～乳熟期 普通期：幼穂形成期～穂ばらみ期
生育概況	早期：「コシヒカリ」の出穂期は平年より4日程度早まった。出穂後の高温の影響による白未熟粒や胴割粒の発生が懸念される。 早植：「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の出穂期は平年より3～5日程度早まった。高温による葉色の低下や下葉の枯れ、赤枯症が目立つ。 普通期：「あさひの夢」の出穂期は平年並～やや早まる見込み。ガスや藻の発生で生育の遅れが見られたが、中干しにより生育は回復している。

1 気象経過（前橋地方気象台の気象データ、8月は第3半旬までのデータ、参考資料参照）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+1.8℃	+0.5℃	+1.2℃	+2.9℃	+2.4℃	—	—
降水量(平年比)	53%	106%	184%	41%	55%	—	—
日照時間(平年比)	115%	110%	111%	159%	59%		

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培（6月15日以前の田植）

早期栽培「コシヒカリ」の生育ステージは、黄熟期～成熟期となっている。6月下旬以降の高温・多照の影響で生育が進み、出穂期は平年より4日程度早まった。作柄は並が予想されるが、出穂期以降20日間の平均気温が27℃以上で経過しているため、高温による白未熟粒、胴割粒の発生による外観品質の低下が懸念される。

早植栽培「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の生育ステージは、出穂期～乳熟期となっている。高冷地では育苗期や移植直後に夜温低下が見られたため、活着や初期生育の遅れが見られたが、その後の高温により生育は回復し、全域で茎数は平年並～やや多く確保されている。出穂期は平年より3～5日程度早まった。

イ 普通期栽培（6月16日以降の田植）

普通期栽培「あさひの夢」の生育ステージは幼穂形成期～穂ばらみ期となっている。移植後、高温の影響により発生した除草剤の薬害やガス害、藻による初期の生育不良は、中干しの実施により回復し、茎数も概ね平年並に確保された。一方、影響を強く受けた一部ほ場では茎数がやや少なく、生育ムラも見られている。出穂期は概ね平年並～やや早まることが見込まれる。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

ア 早期・早植栽培

病害虫は、紋枯病、バッタ類（クサキリ、ササキリやイナゴ等）、斑点米カメムシ類（中山間）が県東部地域でやや多く見られるが、全体で発生は少ない。いもち病も高冷地、中山間地域、平坦地（東部）などを中心に散見されているが、発生量は少ない。葉色の低下が見られるほ場で下葉の黄化、赤枯症の発生が目立つ。

イ 普通期栽培

目立った病害虫の発生はないが、ガス害による下葉や葉先の枯れが見られているほ場もある。7月31日の降雹により前橋、伊勢崎、高崎地域の一部ほ場では茎葉に損傷を受け、生育に影響している。

(3) 作況ほ等の調査結果

ア 作況ほの調査結果（表1参照）

県平均の移植後40日の草丈は60cm（過去平均比100%）、茎数は469本/m²（同102%）であった。出穂期は8月4日（同-3日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6月23日移植）

「ゆめまつり」の移植後40日の草丈は72cm（過去10か年平均比100%）、茎数は528本/m²（同99%）であった。幼穂形成始期は8月5日（-1日早）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6月1日移植）

「ゆめまつり」の移植後40日の草丈は63cm（過去11か年平均比102%）、茎数は670本/m²（同94%）であった。

「あさひの夢」の移植後40日の草丈は65cm（過去10ヶ年平均比102%）、茎数は572本/m²（同88%）であった。

表1 水稻作況ほ調査結果（地域別・作期別）（）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月/日	移植後20日調査		移植後40日調査		出穂期	
		草丈 cm	茎数 本/m ²	草丈 cm	茎数 本/m ²	カ所数	月日
県	6/5(0)	31(99)	206(116)	60(100)	469(102)	8/13	8/4(-2)
中部	6/15(0)	31(95)	240(122)	62(99)	442(104)	2/4	8/9(-4)
西部	6/8(-3)	32(101)	172(109)	64(98)	438(99)	2/4	8/1(-4)
北部	5/22(+2)	28(103)	196(114)	46(98)	525(102)	4/4	8/3(-3)
東部	6/10(+2)	32(99)	228(120)	73(110)	471(109)	1/3	8/5(+1)
早期・早植	5/28(+1)	29(101)	223(115)	56(101)	500(104)	9/9	8/4(-3)
普通期	6/21(-1)	33(96)	176(119)	67(99)	412(100)	0/5	—

注1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。

2) 移植期欄の（）内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。

3) 8月15日現在で調査時期となったほ場のみで、カ所数欄は「調査カ所/設置カ所数」を示す。

4) 早期・早植：6月15日以前の田植。普通期：6月16日以降の田植。

5) 館林市は移植時期が大幅に遅れ、ほ場が変更となったため、県、地区、作型平均から除外した。

(4) 作柄のまとめ（表2）

各地域の作柄は、すべて「並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況 ()内は普及指導課・地区農業指導センター

地域別	作柄	作柄概況
中部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	並	<ul style="list-style-type: none"> ・早植栽培：出穂期～乳熟期。高温の影響により下葉の黄化、赤枯症が見られる。出穂期は平年より4日程度早まった。病虫害の発生は少ないが、中山間地で葉いもち、イネドロオイムシが散見された。 ・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。移植後の高温のため除草剤の薬害、ガス害による生育不良が発生した。中干しの実施により概ね回復したものの、ほ場によっては生育ムラが大きい。降雹による茎葉の損傷が見られる(中部、伊勢崎)。
西部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	<ul style="list-style-type: none"> ・早植栽培：出穂期～乳熟期(コシヒカリ、ひとめぼれ)。穂ばらみ期～出穂期(あさひの夢、ゆめまつり)。出穂期は平年より3～5日程度早まった。葉色が淡いほ場で下葉や葉先の枯れが見られる。降雹による不稔等散見(西部)。病虫害の発生は少ないが、イネドロオイムシが一部地域(富岡)で多い。 ・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。出穂期はやや早まる見込み。高温によるガス害や用水不足(富岡)で生育不良となっているほ場、降雹により茎葉が損傷したほ場(西部)も見られる。病虫害の発生は少ないが、ばか苗病が一部地域で見られる(富岡)。
北部 (吾妻) (利根) (沼田)	並	<ul style="list-style-type: none"> ・早植栽培：出穂期～乳熟期。出穂期は平年より2～4日程度早まった。生育は概ね順調だが、出穂の早い品種で分けつがやや少ない。病虫害は一部地域で葉いもちが見られたが、全体の発生量は少ない。紋枯病、内穎褐変病、イナゴ類ニカメイチュウ、イネツトムシなどは平年並。ばか苗病がやや多く見られる(利根沼田)。
東部 (東部) (桐生) (館林)	並	<ul style="list-style-type: none"> ・早期栽培：黄熟期～成熟期(コシヒカリ、ひとめぼれ)。出穂期～乳熟期(あさひの夢、ゆめまつり)。出穂期は平年より4日程度早まった。出穂後の高温による白未熟粒、胴割粒等の発生が懸念される。 ・早植栽培：出穂期～乳熟期(コシヒカリ、ひとめぼれ)。減数分裂期～穂ばらみ期(あさひの夢、ゆめまつり)。出穂期は平年より5～6日程度早まった。茎数は平年並に確保されているが、葉色の低下、下葉の黄化、赤枯症が見られている。 ・普通期栽培：幼穂形成期～減数分裂期。茎数は平年並だが、ガス害や除草剤の影響を受けたほ場ではやや少ない(東部、館林)。病虫害は、紋枯病(館林)、斑点米カメムシ類(桐生)、バッタ類(桐生、館林)の発生がやや多い。いもち病は確認されるが発生量は少ない。

3 技術対策

(1) 共通

- ア 気象庁発表による長期予報では、向こう1か月の気温も高温となることが予想されている。高温による品質への影響が懸念されることから、以下のとおり適正な水管理や適期収穫等の基本技術を徹底し、被害の軽減を図る。
- イ 生育の前進を見据え、計画的な作業とその準備に努め、荷受け施設においては水稻の生育に応じた稼働計画を設定する。
- ウ 農薬散布については生育ステージに応じた適期散布と適正使用を心がけ、使用履歴の記帳を徹底する。
- エ 斑点米カメムシ類を本田に寄せ付けないために、出穂期の前後各3週間程度はイネ科一年生雑草を継続して出穂させない畦畔管理を行う。そのため、出穂期の2～3週間前と出穂期頃(イネ科雑草発生前)に除草を行う。ただし、やむを得ず1回しか行えない場合は従来と同様に、出穂2週間前までに除草作業を行い、以降は作業を控える。本田で薬剤(液剤)による防除を行う場合は、穂揃期とその1週間～10日後に2回行う。

オ いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病が発生したほ場の粃は翌年の種もみとして利用しない。

(2) 早期・早植栽培

ア 乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、高温が予想される場合は飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。

イ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。

ウ 出穂後 30 日以降を目安に落水し、その後は必要に応じて走水を与える。

エ 高温日が連続すると登熟期間が短縮しやすいことに留意する。また、白未熟粒や胴割粒の発生が懸念されることから、成熟状況を確認して適期収穫を徹底する。

オ 急速乾燥や過乾燥は胴割粒の発生を助長するため、乾燥作業には十分留意し、毎時乾減率は 0.8%以下で乾燥を行う。

(3) 普通期栽培

ア 穂ばらみ期～出穂開花期は湛水、乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、出穂後に高温となる場合は、飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。

イ 葉色が低下しているほ場では、穂肥により高温障害（白未熟粒・胴割米）の軽減を図る。

ウ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。

エ 病害虫の発生状況、発生予察情報を踏まえ、効果的防除を心がける。

オ いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病が発生したほ場の粃は翌年の種もみとして利用しない。

《参考資料》

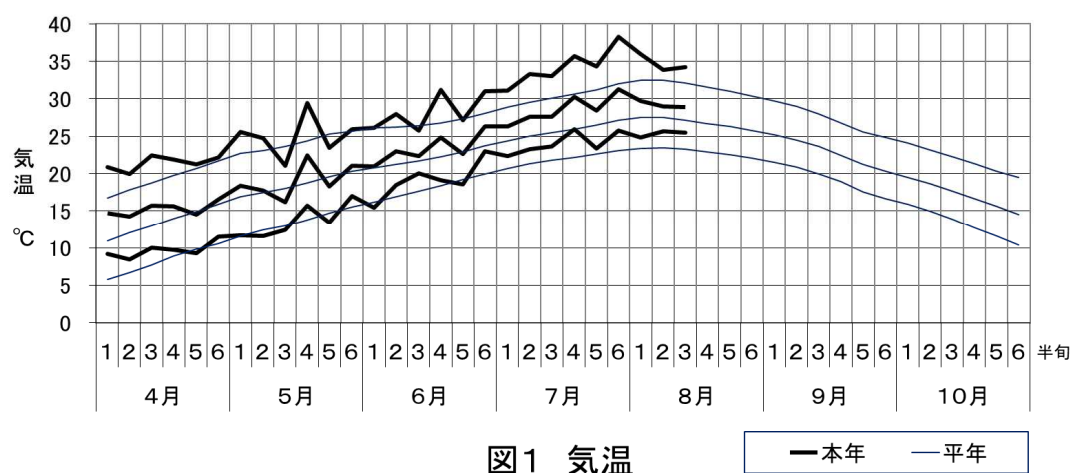


图1 气温

—本年 —平年

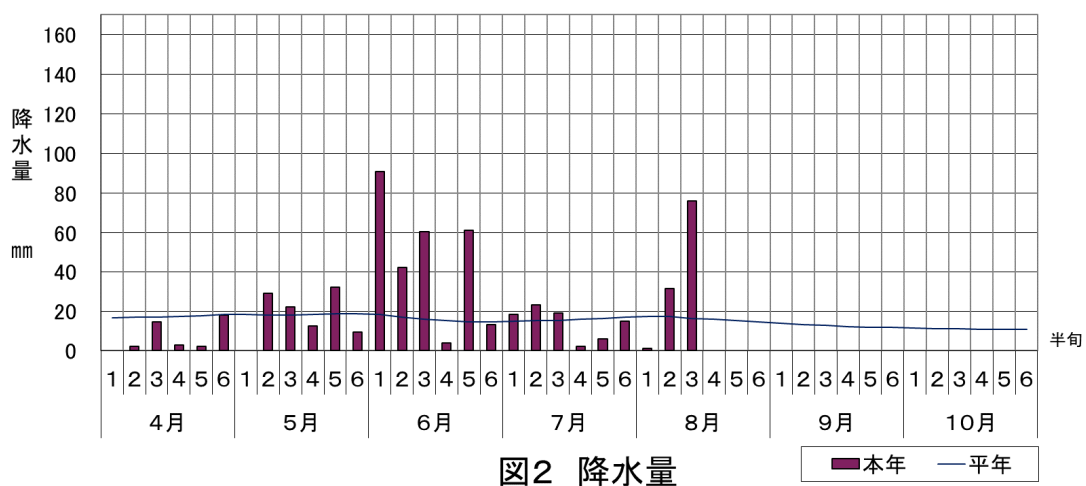


图2 降水量

■本年 —平年

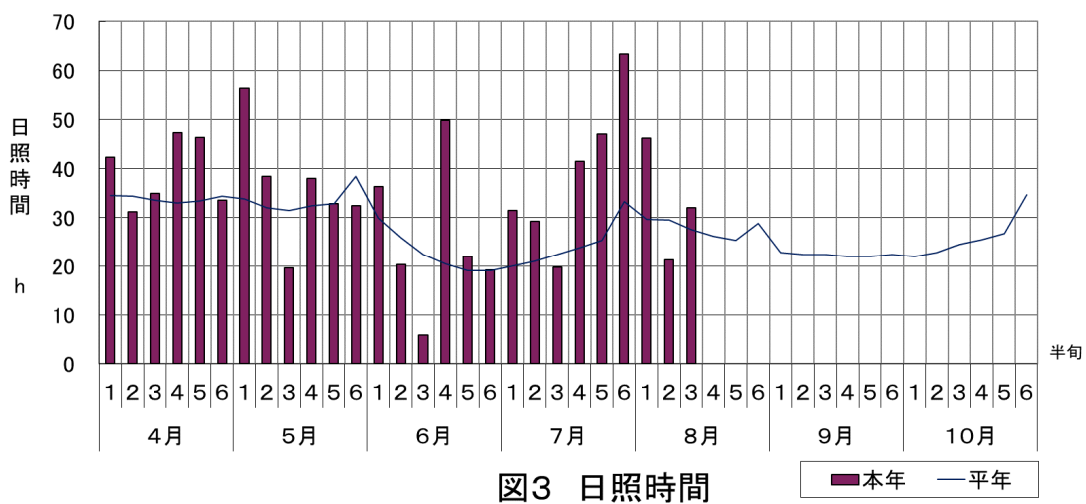


图3 日照時間

■本年 —平年